
デイダラ

ヒロユキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デイダラ

【Nコード】

N7665M

【作者名】

ヒロユキ

【あらすじ】

「世界が変わるわよ」麻衣子はそう言っ僕を連れ出した。いつだって突拍子もない話で他人を困らせる彼女と、争いばかりの世界を悲観した僕。そんな僕らが向かう先に待ち受けるのは、想像を超える光景だった。巨人の足跡を巡る、僕らと世界の物語。

現在連載停止中です。ストーリーが上手くいきそうにないので初めから書き直すかも。再開は未定です。

デイダラ 1 (前書き)

どうも、作者のヒロユキです。

お初の方はこんにちわ。他の作品も読んでくださった方は、またお付き合いよろしく願います。

相変わらず未熟者の作者ではありますが、少しでも上達できるように精一杯頑張っていきたい所存でありますので、応援してくださいとうれしいです。

さて、今回の作品は「デイダラ」というタイトルの物語です。一応ファンタジーという分類になっておりますが、正直なところ、あまりファンタジーっぽい設定は出てきません。その点はご了承ください。

作者の予定としましては、それほど長い話にするつもりはなく、短編レベルの長さになる予定ですので、気軽な気持ちで読んでいただければ幸いです。

デイダラ 1

「世界が変わるわよ！」

携帯電話の向こう、開口一番に彼女がそう叫んだせいで、僕は驚いて無様にもベッドから転がり落ちた。バランスを崩し、前のめりになって、強かに後頭部を打って悶絶した。

それは、七月の早朝。

時計の針が午前四時半を差した頃だった。

前日まで降り続いた雨により、僕の部屋はすこぶる蒸し暑い。二ユースによると、その日は今年に入ってから何度目かの熱帯夜らしく、ぬるくなった空気をブオブオと不穩に唸る扇風機がかき回している。

僕は呻きながらひりひりと痛む頭を摩った。そして、どうして僕がこんな目に遭うのだ、と彼女に対して憤った。そもそもどうしてこんな時に電話が鳴るのだ、と。

この世には様々なマナーが存在するが、相手が明らかに就寝中に電話を掛けてくるのは、まごうことなき、マナー違反である。それもよりによってこんな時、僕が睡眠と覚醒の狭間をさ迷い、寝苦しさ悶々としている時に携帯の着信音を鳴らすなど、もつてのほかだった。

それだけでも、同情されるのに十分たる不運であるというのに、今の僕の後頭部強打による悶絶っぷりは、どうだろう。街頭募金が集まるほどの不運、と言っても過言ではないに違いない。いや、断じてそうだ。僕は言い切る。

「ねえ、世界が変わるかもしれないの！」

しかし、そんな僕の思いを彼女は露ほども知るはずがなく、またしても電話の向こうでそう叫んだ。

世界が変わる？

何のことだ？

身体を打った衝撃があるせいか、僕が単なる馬鹿なのか、それとも彼女が馬鹿になったのか、もしくは二人して馬鹿なのか、僕には彼女が言っている意味がすっきりさっぱり全く分からなかった。ただでさえ寝起きの悪さでイライラが募っているというのに、この状況はあまりにも酷い。

「何の話だ！」

僕は彼女の声に負けるまいと、ようやく起き上がり、怒りを込めて叫んだ。

「今何時か分かってるのか!？」

と。

すると、

「午前四時三十二分二十一秒よ」

間髪なく返ってきたのは、馬鹿正直とさえ思うほど、正確な答えだった。

数秒、沈黙した後で、

「麻衣子は、僕を呆れさせるのが趣味なのか？」

思わずそう聞いていた。

「馬鹿なことは言わないで。今は一刻を争う状況なんだから、あたし、時間には敏感になってるの」

彼女はつんつんと刺すように言う。

「あなたと話しているだけで、もう一分が過ぎちゃうわ。早く目を覚ましなさい」

「眠気なら、誰かさんのせいで、とっくにぶっとんでいったんだけど」

僕は皮肉を込めて言った。

「いかんせん、状況が分からなくてね。どうして僕がこんなに朝早く、麻衣子の怒鳴り声で起きなくてはならないんだ？」

「だから、世界が変わるのよ！」

彼女はまたしても繰り返した。

僕は呆れる。昔からの彼女の悪い癖だ。いつだって他人を唐突な話で翻弄し、嵐を起こすがごとくのわがままっぷりで人々を悩ませる。子供の頃だけならまだしも、もう大人になるうという現段階に至って尚、その性質は消え失せるどころか、遺憾なく発揮され続けているようだ。

ため息をついて、僕は寝ぼけた頭を回転させる。

「ああ、ついに核戦争が勃発して、人類の歴史が幕を閉じるのか？」
「そうじゃないわよ」

彼女はあっさり否定した。

「けど、大変なことが起こったの。世界が変わるくらい大変なこと！ だから私、今あなたのアパートに向かっていると。後十分で着くわよ」

「は？」

またしても寝耳に水だった。僕はごそりと辺りを見回す。一人暮らしの狭い部屋は、僕が当分掃除をさぼったせいで汚く散らかっていた。ゴミ袋が散乱し、汚れた衣服が溜まり、机の上では倒れた缶ビールから雫が垂れている。

ここに彼女が来るのか？

いくら気心が知れた彼女といえど、この惨状にはまず目を覆うだろう。

「いや、今はまずい」

「どうして？」

「察しろ。僕の部屋で何をするのかしらないが」

「何を言ってるの？」

彼女の声が覆いかぶさった。

「今すぐ出掛ける準備をしなさい。髪を整えて、清潔な服に着替えて、顔を荒って歯を磨くの」

「どこに行くつもりだ？」

「こんな朝早くに。」

噛み付くように僕が尋ねると、彼女は一瞬電話の向こうで微笑んだようだった。

「だから、世界が変わる場所よ」

と、そう言った。

デイダラ 2

僕と麻衣子の出逢いは中学の時だった。

先に言っておくけれど、そこにはこれといったロマンチックで夢に見るようなふわふわした仰々しい展開はなかった。男女の出逢いなどというと、往々にして人は、そんなことを思い抱く傾向があるのだろうけれど、そんなものはあくまで幻想妄想の類であり、ドラマや小説で見られる予想外、且つ劇的な展開は、普通、ありえない。事実、現実の多くの出逢いがそうであるように、僕と彼女の出逢いもその例に漏れず平凡だったわけである。

お互いがお互いを一目見たときから特別視するわけでもなく、廊下でバナナの皮に滑った彼女を偶然にも僕が抱きとめるなどという、お花畑的シーンも存在せず、ただ、入学式当日のクラスわけにより、彼女と僕が同じクラスの人間であると判明した程度のイベントに過ぎなかった。

学校の体育館では平々凡々たる入学式が執り行われ、クラスに戻ると、担任教師が勝手に珍しい生徒の名前の読み方当てクイズを実施し、毒にも薬にもならないすかすかの自己紹介が終わったら、後は特に授業があるわけでもなく、皆、解散となった。もう少しだけ詳しく言つと、僕と彼女との出逢いの初日はそんな感じで終わりを向かえたのである。

あの時、間違いなく僕は麻衣子を特別意識してみるようなこともなかったし、彼女にとっても教室の隅で鬱々と文庫本のページを捲る少年など、眼中に収めるところか、気配察知レーダーですら認識しえなかったのではないだろうか。本人に聞いたことはないが、きっとそうに違いない。

それからのことだが。

僕が彼女のことを本格的に知り始めたのは、それから数日が経ち、ようやく中学校という社会システムを体が許容し始めた頃だった。

いったいどういう経緯か、簡単に説明すると、いつものようにクラスの前で文庫本を読んでいる最中、麻衣子の話をしている友達グループの声が漏れ聞こえてきたのである。

それというのが、何でも彼女はとんでもないお金持ちとかで、父親はある大手食品会社のトップという話だった。家は豪邸、ペットにゴールデンレトリバー、庭にはプール、厨房にはお抱えのシェフがいて、学校への送り迎えはリムジンという、絵に描いたようなお金持ちの話である。

何でそんな人間がこんな平凡な中学校にいるのか、という疑問はさておき、僕はその話にとても興味を引かれた。それから、是非とも、彼女のことを知りたいと思い、何か行動を起こそうと考えた。

ここで断わっておきたいが、僕は断じて彼女から漂うそのお金持ち臭につられ、電灯に群がる羽虫のごとくして、気色の悪い下卑た笑みを浮かべ、彼女への接近を試みようとしたわけではない。ただ、それだけクラスの人間に話題になっている少女がどんな人物であるか、純粋で知的な好奇心に駆られ、僕は教室の隅っこから、いつも皆の輪の中心に座す彼女を健全に眺めることにしたので。

そうしてみると、おお、なるほど、確かにお金持ちっぽい。黒く流れる艶のある髪に、五円玉に隠れてしまいそうな小さな顔。品があって、清楚で、綺麗で、まるで人形みたいで、およそ深窓の佳人という言葉はこういう人に対して使うのだろうな、と僕は感心するように思った。彼女のうなじの辺りから漂う、清く麗しい澄んだオーラはあの当時の僕の穢れなき魂を揺さぶった。

しかしながら、あの時の僕としては、自分のような地味な人間が、

彼女のような高貴な人間と知り合いになるはずもなく、同クラスでありながら、何の接点も持たないまま、卒業の門をくぐることになるだろうと想像、いや予言していた。

あの頃の僕は今よりもさらに臆病な人間で、先生に怒られることにびくつき、誰かから目を付けられることに怯え、いつも部屋の隅にいるような気弱な少年だったのだ。

主観的にも客観的にも、交わるはずの無い、僕と彼女の人生。

しかし、人生とは実に奇怪なもので、そんな僕と彼女はあるときを境に急接近することになる。

それが、図書委員会だった。

中学三年の春。

義務教育も無事に終了の兆しを見せ始め、皆次第に将来のことに目に移り始めている時分に、僕は、図書委員というどこかひっそりとした委員会に所属することになった。

委員会とは大抵クラスの話し合いにより、一人から二人選出されるのだが、僕はたまたま暇な人間という至極簡単な理由でその役割に充てられたのである。

まあ、それだけならば、不思議でもなんでもない。しかし、意外だったことに、そこには、あのお金持ちの麻衣子もいたのだ。

正直言って、彼女が入るような委員会ではないと僕は思っていただけに、これは新鮮な驚きだった。

「よろしくね」

「よ、よろしく」

にこやかな笑みで握手をしてくれた彼女に対し、僕は、初めて話をしたことに少々感動しながらも、思わずこつ訊ねていた。

「どうして、図書委員に？」

すると、彼女は機嫌を損ねたのか、口をへの字に曲げた。

「私が図書委員だと変かしら？」

「いや、そういうわけじゃないけれど」

睨まれて縮こまる僕。

むすつとしたままの彼女はその理由として、一つこう挙げた。

「全ての委員会を一度経験しておきたかったのよ。大変そうだから、面白そうだから、そういう考えは抜きにして、将来役立つ大事な経験だしね」

へええ……。

僕は確かその時、そんな感じで適当に返事を流した記憶がある。けれど、本心では、かなり驚いていた。

中学生でありながら、将来のことを考え、今の内から多種多様な経験を積んでおこうなどという殊勝な心がけ、とても自分に出来ることではない。

この行動力は、見習うべきだな。臆病な僕はそう思った。やはり、彼女は自分とは違う、優れた気品ある人間なのだ。

デイダラ 3

しかし、あるときだった。

僕が彼女を見る目が一変する事件が起こった。

それは、月に一度生徒だけで行われる定例の図書委員会議のこと。全員が会議テーブルの周りに座り、議題が、返却期限を超過した本の回収方法から、三ヶ月に一度行われる本棚整理の当番に移ったときだった。

僕から見て、一番離れたテーブルの角に座っていた男子生徒二人が突然に立ち上がり、互いに罵りあいながら、取っ組み合いを始めたのである。

がたん、と派手に椅子がひっくり返り、積んでいた本が崩れ、むわっと埃が舞い、場は騒然とした。

一体全体何がこの二人の熱き闘争本能を駆り立てたのかは知らないが、とにかく、僕は巻き込まれないようにとその場から数歩退いた。

昔から争いごとは嫌いだった。

人と人が殴りあったり、罵りあったりすることは、テレビや本で間接的に触れた表現ですら、嫌悪した。どうして、こんな風に人と人は争うのだろうと思う。だって、殴られれば痛いし、馬鹿にされれば気分が悪くなる。なんて言っても怖いし、見ているだけで寒気がするのに。

対峙し、目をぎらつかせた二人を見て、僕は足が竦んだ。緊張で、頭が痛み出す。

と、その時、誰かが僕の袖を引っ張った。

「ちよっと、弥一君」

見ると、麻衣子だった。

「え？」

彼女は騒動が起こっている方を指で差した。

「あれ、放っておくつもり？」

僕は身構えた。

まさか、自分に止めに入れと言い出すのだろうか。

確かに、彼女の性格からしてみれば、こういいういざこざが起こった場合、まず見過ごすタイプではないだろう。真っ向から難局に立ち向かい、自らの豊富な経験を生かし、場を丸く治める。が、しかし、そこで自分を差し向けるというのは、大いにお門違いで、問題外で、想定外だった。

「無理だよ、僕が殴られるだけだつて」

僕はシュレッダーに突っ込まれる紙を想像した。自分が彼らの間に割って入るうものなら、たちまち成す術も無くぼこぼこにされ、結果は見るも無惨ということは目に見えている。

しかし、彼女はきよとんとしてこう言った。

「何よ。誰もあなたに止めに入れて言っていないわ」

「は？」

「ほら」

そして、彼女は部屋の壁の方を指差すと、とんでもないことを口にした。

「あなた、あそこの窓から飛び降りなさい」

僕は目を瞬かせた。「冗談だろ？」

「何を言ってる」

「だから、あそこの窓から飛び降りて、それで地面に無傷で着地してみて」

「はあ……」

これにはさすがの僕もほとほと呆れた。目の前で喧嘩の最中だというのに、何を寝言を言っているのだろう。やんちゃな子供じゃあるまいし。いくらなんでも、こんな状況で、いきなり三階の部屋（会議場所である図書室は三階にあった）から飛び降りろ、拳銃の果てに無傷で降り立てなどとは、常人が行う思考の範疇にはないことは確かだった。

「何で今、そんなことを僕がしなくちゃなんないんだよ」

しかしながら、そんなことで取り乱したりしない皆も恐れる低血圧な僕は、彼女をなだめるように訊いた。

「間違いなく怪我をするし、意味も分からないだろう？」

しかし、彼女は表情をぴくりとも崩さない。

「そうね、確かにその通りかもしれない。でも、やってみせてよ。喧嘩を止めるにそうしてみるのもいいと思うの」「
「いったいどういう理屈だよ」

これにはさすがの僕もお手上げだった。

「だから、皆が驚くようなことをするのよ。ありえないこと、奇跡を起こすのよ。そういうことをするの。そうすれば、喧嘩なんてどうでもよくなって、すぐに止めるわ」

彼女は目をきらきらとさせている。

僕は絶句した。

確かに、ここでいきなり僕が窓から飛び降りるなどというキチガイ染みた行動に出れば、喧嘩どころではないだろうが……。

しかし、それには見合わない代償がつく。

「仮にそうだとしても、僕が怪我するだろ!」

「だから、無傷で落ちるのよ」

彼女は淡々と返した。

「どごぞのサーカス団員か、僕は!」

ついに堪りかねて、僕は大声を出し、麻衣子の手を振りほどいた。きゅん、と彼女が悲鳴を上げる。

そんなことをした自分に驚きつつも、彼女に対してもびっくりしていた。

もつと頭のいい子だと思っていたのに。

こんな風にわがままで、他人にむちゃくちゃなことを言う子だとは、とんだ女の子だった。住んでいる世界が違うという言葉があるが、まさに、僕と彼女はいろんな意味で世界の違う人間だったのかもしれない。

金を持つ者と持たざる者。

有名と無名。

活発と根暗。

僕の常識は彼女の非常識、彼女の常識は僕の非常識。
鏡の中を見ているような、まごうことなき正反対。

彼女にそれまで僕が抱いていたただただ高貴なイメージがばらばらと瓦解していく。

と、彼女はまた諦め切れないのか、椅子から立ち上がり、僕の頭を掴んだ。

「いいから、落ちてみなさいよ！」

僕は一瞬ひるむが、

「嫌だ！ 自分で落ちろ！」

と言い返した。

いくら相手が女性とはいえ、こんな風に乱暴されて、黙っているわけにもいかないと奮い立ったのかもしれない。

そして、彼女の手を再び払った。すると、彼女はバランスを失い、尻餅について倒れこんだ。ひらりとスカートが舞い、危うい場所が見えそうになった。

さすがにこれはやり過ぎだっただろうか。僕は少し後悔した。また何か怒鳴られるかもしれない。数歩さがる。

しかし、

しかし、彼女は何も言わず、払われた手をじいつと物珍しそうに見つめている。彼女の手は、ちょうど僕が払った部分が赤くなっていた。彼女の瞳が、それをまるで生き物であるかのように、捉えている。ずっと、見ている。

もしかすると、彼女はそんなことをされた経験がなかったのかも
しれない。僕はそう考えた。

何しろ、父親が大企業トップのお嬢様として育てられていたのだ
としたら、周りが彼女に対して怒ることも無く、過保護になるのも
頷けるというものだ。

すると、ようやく我に帰ったのか、

「痛いわねえ！」

赤くなつた掌を握り締め、彼女は再び僕に向かってきた。こんな
れば後には退けない。来るものなら来てみる、と僕はファイティン
グポーズを取る。しかし、彼女はそんなものもろともせず、腕を伸
ばし、僕の頬を思い切りぶつた。

視界が揺れ、星が散って、ふらふらと腰砕けに僕は倒れた。

「が、ぐう」

視界がくらむ。涙が滲んだ。

痛みを堪えて立ち上がりながら、僕はいったい何をやっているの
か、と今さらながら思った。すぐ隣では別の喧嘩が繰り広げられて
いるというのに、そちらに止めに入らないばかりか、どうでもいい
ことで、それほど親しくも無い女子と殴り合っている。

馬鹿げていると思った。

とんでもなく、馬鹿げている。

今すぐにこんなことは止めるべきだ。

しかし、

「ぶっ、ざけんな！」

僕は叫んだ。なぜか、もう止まらなかった。体がどうしようもなく熱くなり、いつもなら僕を静止するはずの理性のストッパーも外れていた。

きっと、こんなことを叫んだのも生まれて初めてだった。

拳を振り上げる。

そして、僕は生まれて初めて、他人を殴ろうとし。

が、その拳は振り下ろされることはなかった。

「え？」

腕が動かない。見ると、知らない間に、後ろから、近くの男子生徒に腕をつかまれていたのだ。

はっとした。

僕は周囲に首を巡らす。先ほどまで喧嘩していた二人が視界の端に見えた。彼らはもはや殴り合ってはおらず、両手をだらんと垂らして、僕らの方をじっと見ていた。加えて、他の皆の視線もこちらに釘付けだった。

全員が全員、ぼかんとした表情で僕らを見ていた。

その瞬間、僕の視界が青紫色になり、さっと血の気が引くのが分かった。僕と麻衣子は目を合わせ、それから、二人して、無言で頭を下げた。

その後、案の定、僕と彼女は教師から説教を受けた。職員室に呼び出され、何度かぺこぺここと頭を下げた。

僕と彼女が喧嘩したという事実を知ると、教師は目を丸くしていた。おそらく教師にとって僕は誰かと喧嘩をするような血気盛んな男の子、という風にはみえていなかった。ただろうし、彼女にしたって、誰かと殴りあうようなお転婆な女の子、とは見えていなかったに違

いない。

教師は腕を組み、とりあえず、という雰囲気であだこうだ、喧嘩をすることがいかに不毛で馬鹿らしく無益なことかを当たり障りない感じで語りだした。

とにかく、それが僕にとって生まれて初めての教師からの説教だった。

ふふ。初めてづくしのあの日。今思い出しても、苦々しい。けれど、あのときの僕は、特に悪い気持ちじゃなかった。

胸の中に意味不明で、理解不能な清しさが生まれていて、教師を見ないで、

窓の外の、

どこまでも、

どこまでも続く、

あの青い空を見ていた。

そして、時折、教師がコーヒーを啜るのにあわせて、僕と麻衣子は目を合わせて何度も笑った。なぜなのかは、わからないけれど、そうしていた。

あれは、本当にとっても不思議な体験だった。

それから。

雨降って地固まるとはよく言ったものだが、僕と彼女はまさにそれだった。

あの唐突で、波乱の殴り合いがあつてからというもの、僕らは一緒に過ごすことが多くなった。授業合間の休み時間、昼食時間、掃除時間、放課後の下校時。いつも一緒にいた。

誰かが、僕たちが付き合っていると、噂した。

でも、別に、僕らの間にあるものは、好きとか嫌いとか、そういう感覚ではないと二人とも分かっていた。上手く表現できないが、心の深いところで、お互いに認め合っている部分があるのだと思う。

ふいに雨や風が強くなったときに隠れる秘密の避難所を、共有しているような気分だった。

そして、そんな僕と彼女の関係は大学生になった今でも続いている。

デイダラ 4

アパートの前に彼女の車が止まったのは、きっかり十分後だった。僕は洗いたてのボーダーの入ったポロシャツにジーパンという何の色気もない服装で彼女が車から降りてくるのを待っていた。

僕を見た彼女は目を点にした。

「ふざけてるの？」

「ふざけてるのはどっちだ」

僕は言い返してやった。

「朝っぱらから電話してきて。まだろくに太陽も昇ってないぞ」

半眼で不平を言うとうぐう、とお腹が鳴ったちなみに、朝飯だって食べていない。

しかし、彼女は僕の寝起きの悪さからくる不機嫌など歯牙にもかけず、腰に手を当てて逆に睨みつけてきた。

「小さな男ね。その程度のことですっかかってくるとは。いい？」

今すぐきちんとした服に着替えてきて。近所のコンビニに行くんじゃないのよ」

「じゃあ、どこに行くんだ」

相変わらずの上から目線に、僕はかちんと来たが、とりあえず我慢して穏やかに聞いた。

すると、彼女は何を言うかと思えば、

「飛行場」

と、いきなり告げた。

「何だつて？」

「へりをチャーターしてるから、そこから発つわ」

この唐突さには怒りを通り越して、僕は呆れた。全く、いかにもお金持ちがやりそうな気まぐれだった。人を朝早くに起こして、どこに連れて行くのかと思えば……。僕は不快感に眉間に強く皺がよる。

「旅行にしちゃ、ずいぶん乱暴な予定の組み方だな。気乗りしないぞ、そんな行き当たりばつたりのゲリラ的な旅行は」

すると、彼女は僕の言葉をハハンと笑い飛ばす。

「馬鹿ね、旅行なんて行くわけないでしょ。そんなことよりずっと有意義なことよ。ほら、早く支度なさい。待っててあげるから」

一向に状況が飲み込めないまま、僕はそのまま彼女に追い立てられるように部屋に押し込まれた。ばたん、と扉が閉められ、「早くしてよね」とくぐもった声で外から言われる。僕は少しうんざりし、壁にもたれかかった。

彼女のあの自信に満ち溢れた顔。

それが目の前に浮かぶ。

ああなれば彼女は止められない。あれは誰が何と言おうと、あの手この手で言いくるめて自我を貫き通す、意思の強さが秘められている顔なのである。

はあ、とため息が漏れる。

僕は今さら反論の材料を探したところで無駄だろうという失望を

かみ締めつつ、服を着替え始めた。

全く、せつかくの休日だというのに。

いったい今回はどんな目に合わされるのだろうか。僕はシャツに手を通しながら、得体の知れない予感に身震いする。

準備を追え、戻ってくると、彼女は僕の服装に一応満足したようで、それ、車に乗りこめと指示した。後部座席に座るとエンジンがかかり、車がスムーズに発進する。すぐに車は国道に出た。交通の少ない道路を高速道路へ向けて進んでいる。

僕は後部座席で、窓の外へ目を向けた。

夜の藍色と明け方の山吹色がせめぎ合う山々の稜線を眺めていると、またしても今日が始まってしまったな、とぼんやり思った。

「これ、食べたなら？」

運転席から後部座席の僕に彼女が何かを投げて寄越した。僕は小さく歓喜する。先ほどから妙にお腹がすいているので、食べられるものならば、どんなものでもいい。

受け取ってみると、それは見覚えのあるもので、「わらび餅クッキー」というお菓子のパックだった。

わらび餅クッキーは僕が子供のころからあるお菓子で、製造元である会社が洋菓子和菓子の融合という斬新なアイデアに基づき、研究に研究を重ねて発売されたものだった。その風味、食感は独特で、一度食せばまた食べたいと賞賛を浴びせるものと、二度と作るなど、苦情を投げつけるものとで、一時ニュースにもなるなど有名になった。珍しいもの見たさの人々の行列が店にでき、発売当初は陳列棚がいつも空っぽだったと聞く。

今では、そんな騒動もとつくに収まっているものの、根強いファ

ンからの支持が続いているおかげで、こうして、今でも販売されているのだ。

ちなみに、僕がそのクッキーの肯定派、否定派、どちらに所属していたかというと、別にどちらに所属しているわけでもなかった。もちろん、お菓子の味自体好きでも嫌いでもなかったというのもあるが、どちらかの立場につくと他者を否定しなければならぬことが嫌だったという理由もあった。

一方で麻衣子はこのクッキーが大好きで、いつでもどこでも持ち歩いているというほどの、肯定派ということだった。彼女の父親は別の食品会社のトップだというのに、平然と毎日の食べていたものだから、僕は複雑な気持ちでそれを見ていたのをよく覚えている。

「これはね、奇跡的な味なのよ」

いつだったか、僕が麻衣子にどうしてそこまでそのクッキーが好きなのか訊ねたとき、彼女は興奮しながらこう答えたのを覚えている。誇らしげに一枚のクッキーを空に翳かざしながら、

「全ての国で推奨すべき国民のお菓子！」

とか、

「タイムカプセルに入れて、未来に残すべきお菓子の遺産！」

などと、大げさに言っていた。

「そんなことしたら、カビが生えちゃうよ」

とつい僕はそんなことを言っただけ、むっと唇を突き出した彼女に、肘で小突かれたものだ。

まあ、そんなどうでもいいことはさておき、僕は久々に見るわらび餅クッキーのパッケージをまじまじと見つめ、それから一つの袋を開けると口に放り込んだ。

歯で噛み砕く。すると、じんわりと独特の甘みが口に広がった。空腹は最大の調味料と言うが、確かに、今のわらび餅クッキーは今まで食べたことのあるものの中で一番においしかった。とても癖のある味の食べ物ではあるけれど、彼女が感じている感動が今なら分かるかもしれないと思う。

うまい、うまい、うまうま。

そのまま何も考えずサクサク口に運んでいると、ふと、ルームミラー越しに麻衣子が睨んできた。

「ちょっと、全部食べないでよ。私もお腹空いてるんだから」

その眼光があまりにも鋭利で、ひやりとした冷たさを帯びていたので、僕は一瞬悲鳴を上げてしまいそうになった。

「わ、分かっているわ」

食べかけのクッキーを口に突っ込む。

「でも、君はまず食事をする事より、僕にきちんと事情を説明するというのが、最優先事項なんじゃないのか？」

すると彼女は、幾度か目をぱちぱちとさせて、

「そうか。まだ話していなかったのよね」

とぼんやりと言った。

そうだそうだ、僕は心の中で抗議する。さらに付け加えるならば、いますぐ僕への非常識な態度を謝り、自宅に送り届けて欲しいものである。

僕はまた一口クッキーを齧った。

「いったい何があったんだよ」

彼女はごほん、と咳をして声を整え、ひどくもったいぶった様子で話し始めた。

「……その、見つかったのよ」

「何がさ」

「だからさ、海の真ん中にさ、こつ、ぷわーっ、と浮き出てくる感じだよ」

じりり、と僕はクッキーの端を歯ですりつぶすように砕いた。

「だから、何だよ」

「……それは」

「それは？」

「……巨人の足跡なの」

その瞬間、僕の口の中で粉碎されたはずのクッキーがごそごそと集まり、凝集し、一つの石ころのような塊となって、胃袋の中にとすんと落ちていった気がした。

なんだそれは。

「巨人の足跡が見つかったのよ。途方もなく大っきいの。東京ドームが入るくらい」

彼女は突然、留め金が外れたように、ミラー越しに目をいっぱいに見開いて、そう誇るように語った。

僕には訳がわからない。

「おい、どういふことだよ。ちゃんと説明しろって」

「だから、そのままよ。日本の南の海でさ、最初は漁師さんが見つけたんだって。遠洋漁業って言うの？ よく知らないけれど。とにかく、昨日のことよ。どこか遠い漁場に行く途中に、海底がへこんでるのに気がついたの。最初は海の上からだったから、よく分からないけれど。浅瀬に妙な感じのやけに綺麗な穴ぼこがあるって。それで、よくよく辺りを見渡してみたら、足の親指から小指が並んでたんですって」

彼女がハンドルを握りつつ、半分こちらを振り向きながら熱っぽく語るのを目の当たりにして、僕はますます混乱した。状況整理しようとする脳内の小人の軍勢が、方向感覚を失い、あっちの壁にぶつかり、こっちの壁にぶつかっている様子が目に浮かぶ。

「一応聞くが、たまたまそれっぽく見えるんじゃないのか？」

しかし、彼女は力強く首を振る。

「そうじゃないわ。まだニュースには報道されていないけれど、私その写真を見たって人から話を聞いたの。あれは間違いなく生物の足跡だって言ってたわ。とても冗談を言えるような人じゃないし、かといって、自然に形勢されたものと見紛うほど目が節穴な人じゃないわ。だから、信憑性はばっちり」

「その写真は無いのかよ」

「残念だけど、今は見せてもらえなかった。だから、これから見に行くの。へりに乗って」

「……」

僕は言葉を失って、そのまま、どつかとシートにもたれかかった。柔らかなシートがぼわんと弾んで、何だか、現実味のなさを加速させるようだった。

巨人の足跡ねえ。

朝早くに突然起こされたと思えば、そんな奇妙奇天烈なものを見せられに行くとは。

「……ダラ」

と、僕は彼女がハンドルを握りつつ、遠い目をして何かを呟いていることに僕は気づいた。

「何だつて?」

しかし、僕の問いかけには気づいていないのか、彼女はこちらを振り向くことなく、遠い水平線の向こうに何かを見出しているようにじっと見つめている。その瞳は、空の薄い表面を吸い取った溶液から一滴の雫を垂らしたかのように、透明に淡く澄んでいた。

「……来たんだよ、やっぱりそうだ」

僕は耳をすませる。

「……デイダラ」

「え?」

その言葉は、僕の胸の奥の奥の澱をすつと掬い取るようだった。車が前進しながらゆっくりと後退しているかのような奇妙な錯覚に襲われる。

きゅるきゅるとネジが回る音と共に、僕の記憶が蘇ってきた。

デイダラ 5 (前書き)

どうも、ヒロユキです。

三ヶ月ぶりの更新でしょうか。ずいぶん、間があいてしまいました。正直、続きは書けないかと半分諦めていましたが、やはり、最後までやらないのは、なんとも後味が悪い。なので、少しずつですが、書き進めていこうと思います。とりあえず、今は完走が目標です。

デイダラ 5

デイダラ。
デイダラ。

彼女がその言葉を頻繁に呟いていたのは、僕らが高校二年の夏休みだった。それは僕が思い出すに、彼女がその言葉を発していた以外に特に回想すべき事例の見当たらない無為なる夏休みであったことは間違いない。

なにしろ、僕らは二人して、休み中、健全な高校生たちに混じって海に遊びに行くでもなく、実家に帰省するわけでもなく、宿題に精を出すでもなく、クラブ活動に邁進するでもなく、漠然と茹だるような日々を鬱屈と過ごしていたからである。

中学を卒業し、僕と麻衣子は同じ高校に入学したわけなのだが、お互い友人を作るわけでもなく、いつも二人でただららとしていたので、当然と言えば、当然の結果なのだが。

まあ、そういうわけで、そんな高校二年の暑い夏のある日、僕と彼女はやはり、午後の気だるい時間帯を僕の家のリビングで漠然と過ごしていた。

具体的に言うと、家に置いている漫画という漫画を読破してみた、彼女が提案してきた、正体不明の外国語が飛び交うむちゃくちゃなしりとりを試してみたり、テレビをつけて、ワイドショーに評論家取りでコメントを試してみたりという行為を続けていた。

しかし、それも彼女がカーペットに零したソフトクリームの掃除を僕が任される頃になると、さすがに場の空気がひどくよどみ始めた。

二人してもふもふへもへとした味もしない綿菓子を胃袋の中に延々と詰め込んでいるような気分になってきたのである。

そして、ついに僕らは、そのあまりに退屈な時間に、ついに僕と彼女の脳が分離し、とろとろのスープになって溶けだしてしまうのではないかという狂気に満ちた錯覚を覚え始めた。

彼女は天井を指差し、

「嗚呼、あそこに天使がいるわ。こっちを向いて微笑んでる！」

と叫びだし、僕は僕で、羽の生えた奇妙なねずみをスリッパで叩き潰そうと走り回った。

そして、どうやらこれはまずいと危惧したらしい彼女は、急遽、図書館にでも行こうと提案をした。

「人々の深遠なる歴史が生み出した知的文化に触れることによって、私たちの精神はたちまち若き賢人の域へとレベルアップするはずよ」

と腰に手をあてつつ、言っただけなのである。

僕には最初、それがただの取るに足らない戯言にしか聞こえず、下らないと計画を拒否しようとしたが、しかしながら、このまま何もせず、青春の一日を終えてしまうのはあまりにももったいない。それに、^ほ進む青春のエネルギーを悉く怠惰な生活に葬り去ることは、^こゴミの不法投棄に等しく法律に違反するのではないかとも考えられる。

つまり、このまま部屋で幻覚を見続けて一日を潰すよりは、よっぽど彼女の案は健全で、現実的で、魅力的で、合法的で、アグレッシブなのである。

よって、僕は結局、彼女に賛成することにした。

「そつこなくなつちや」

彼女は調子よく指を鳴らす。

デイダラ 6

そして、僕らは意気揚々と、近所の図書館に足を運んだ。

小学生の時から、僕がほとんど足を踏み入れることのなかったその場所は、相変わらず、蓄積された知識が醸しだす、独特な空気が漂っていた。

せつかくの夏休みだというのに、勉学に励む子供たちの姿は見受けられず、館内は実に閑散としていた。最近の子供たちは忙しいと聞くが、皆塾にでも通っているのだろうか、と僕は思う。

その代わりに、というか、閲覧席にはただ新聞や雑誌などに目を通す無愛想な大人たちがいた。彼らは神経質そうに額に皺を寄せ、文字を睨むようにして読んでいた。

僕は何となく目を伏せて、彼女と共に文学作品が並ぶ棚を目指した。

陽光がブラインドから差し込み、綺麗に磨かれた床をきらきらと照らしている。本からはどこか湿った紙の匂いがした。

その匂いを嗅ぎながら、僕は好みの本を探し始めた。そして、しばらく経ったときだった。

「ねえねえ」

ふいに声がして、隣を見ると、麻衣子がにやにやしながら立っていた。

「弥一君、これ、読んでみてよ」

と、片手に本を開いてこちらに向けてくる。

何か面白いことでも書いてあるのだろうか。僕は試しに読んでみ

ようとした。彼女は何か面白いことを発見すればいちいち僕に報告するくらいがあったのだ。

しかし、僕はそれを覗き込んで、すぐさま身を守るように目をそらした。本の文面が目に入った瞬間、それが彼女のイタズラだと悟ったのだ。

「……ふふふ、えっち」

彼女は眉を動かして、愉快気に笑う。

何を隠そう、麻衣子が手に持ってきたものは、紛うことなき官能小説だったのだ。濃厚な桃色エロスの匂いが、その文面からもややと立ち上っているのが分かる。

「な、何だよ、麻衣子が持ってきたんだろ。馬鹿じゃないのか？ そんなもの、早く戻してこいよ」

僕は顔が赤くなるのを見られないように、そう言い放って顔を背けた。男子たるもの、女子の前で、易々と取り乱している様子を見せるべきではない。

が、彼女は素早い動きで回り込むと、いたずらっぽく覗き込んできた。

「ねえ、私にここに書かれてることと、同じこととしてあげよっか」「うぐっ　なあ!？」

汚れたことなどまるで知らない、純真清らかだったあの頃の僕が、その瞬間、猛烈に心かき乱され、動揺してしまったことは、説明を必要とするところではないだろう。

僕はさながら茹でダコのごとく真っ赤になり、後方不注意のまま

後ずさつて本棚に衝突すると、収めてあつた書物をばらばらと床に落としてしまった。なんとも、無様この上ない。

そして、彼女はその醜態を見るや、

「あ、動揺したわね。この変態」

と、欣喜雀躍きんぎやくやくして手を叩いた。自らの思惑通りに事が運び、完全に僕の上に立つたと思つているのだらう。

哀れ、僕はそんな彼女に言い返すことも、自らの赤くなった顔を隠すことも出来ず、ただあわあわと口を開閉しながら、情けなくも散乱した本を掻き集めた。いったい何をやっているんだという気持ちになる。

その間も彼女は頭上から嘲笑した。

「あはは、今想像したんでしよう。弥一君つて本当にどうしようもない変態なんだから」

彼女の言葉には一切の容赦がない。

おい、おふざけが過ぎるぞ。

さすがにそう言い返そうかと、僕が顔を上げるが、その言葉が僕の口から発せられることはなかった。

何を隠そう、僕の言葉よりも先に、その図書館で暇つぶしをしていたのであろう、通りすがりの老人からきつい一喝を喰らってしまったからである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7665m/>

デイダラ

2011年10月6日00時26分発行